



Title	イギリス世紀末文学におけるテキストと言語 : ペイターとワイルド
Author(s)	玉井, 暲
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42799">https://hdl.handle.net/11094/42799</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	たま い あきら 玉 井 暲
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 15585 号
学位授与年月日	平成12年4月3日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	イギリス世紀末文学におけるテキストと言語 ——ペイターとワイルド——
論文審査委員	(主査) 教授 石田 久  (副査) 教授 河上 誓作 助教授 森岡 裕一

#### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ウォルター・ペイターとオスカー・ワイルドに代表されるイギリス世紀末文学の特質をテキスト構造と言語意識の検討を通して解明しようとした研究である。まず、ジョン・ラスキンの詩学と言語観に世紀末文学の先駆者としての特徴が窺えることを明らかにしたあと、ペイターとワイルドの主要な文学テキストを具体的に分析し、最後に、世紀末文学の後継者であるアーサー・シモンズの象徴主義の詩学が孕む問題について考察している。本論文は、4部からなる本論に序章を加えた構成で、A5版で、総頁数370頁（注・参考文献を含む）、400字詰め原稿用紙に換算して約800枚の論文である。

第一部は、ラスキンのパセティック・ファラシー論を取り上げ、言語表現において感情的側面を排除し、「ありのままの事実」を追求する姿勢には、表現媒体の物理的条件を厳しく見極めようとしたペイターの芸術論に通じる面があることを検証している。ラスキンの詩学を、ペイターのそれと比較・対照することを通して、ラスキンの世紀末文学者としての先駆的側面を明らかにした。

第二部は、ペイター文学を小説作品と批評の分野から考察した8篇の論文から構成されている。まず、最初の小説『家のなかの子供』を取り上げ、主人公の外的成長の物語と内的回想の物語とがメビウスの輪のごとく繋がっているテキスト構造を指摘する。続いて、この小説テキストが孕む複合的構造は、代表作『享楽主義者マリウス』に継承されることを明らかにする。結論として、物語空間において過去・現在・未来がアナクロニズム的に混成されるパリンプセスト的風景と、小説の中に他のテキストが引用されるインターテクスチュアリティの言説空間が、この小説の重要な特徴を形成していることを論証した。

第二部後半は、ペイターの批評の特質を検討する。「あらゆる芸術は音楽の状態を憧れる」というペイターの有名な命題を問題にし、ペイターが原論では純粋な芸術的完璧とその自立性を主張するが、具体的な作品分析となると現実や生のヴィジョンを語るという落差に注目し、ここにこそペイター文学の本質があることを論じる。また、文体論においても、統一的構図に基づく建築性を志向しながら、一方で規範からの脱線性を歓迎する傾向のあることを指摘し、この文体観の特質はモダニズムの詩学に通じることを示唆している。

第三部は、ワイルド文学を小説、批評、劇、詩、書簡の分野から論じた8篇の論文から構成されている。まず、小説『ドリアン・グレイの肖像』の物語空間の、図柄と地とも呼べる重層構造を指摘し、この多義性あるいは批評性を孕んだ特質はモダニズムに結びつくことを説いている。次に、ワイルドの代表的批評「芸術家としての批評家」が、

純粹・自立性と文化・歴史への傾斜との両極性に基づく理論であることを論証している。また喜劇作品における認識行為自体や認識の相対性のモチーフの存在を指摘したあとで、『真面目が肝心』を検討する。この相対立するベクトルの拮抗が装置化された劇的空間において、快楽・欲望の充足における両義性がダイナミズムを伴って表象されるありようを、ディコンストラクション的分析によって見事に捉えている。こうしてワイルドの多義性あるいは相対性をおびたテキスト空間が世紀末文学の重要な特質を表象するものであることを説く。

第四部は、シモンズの象徴主義理論が、マラルメが提唱する、言葉同士の互いの反映によって輝き出す言葉の自立空間を憧れつつも、詩人の息遣いの聞こえる情緒的な抒情に惹かれる面を指摘し、ここに過渡期世紀末の批評家の姿を捉えている。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、世紀末文学を論ずるに当たり、ヴィクトリア朝文学からモダニズム文学へと展開していくイギリス文学の流れを視野に入れ、大きなパースペクティブのもとにその特質を解き明した本格的な世紀末文学研究である。その上、個々の文学作品の慎重な分析の手続きを踏まえて展開する論考には、着実な論証性と高い説得力がある。また、物語が重層性をおびるテキスト構造、表現内容と形式のズレが結果的に生み出す不思議な魅力、言語意識の孕む伝統に対する転覆性、テクスチャーの非均質性などについての興味深い指摘は、論者の斬新な着眼として評価されねばならない。とくに、ペイターとワイルドの小説テキスト、批評、文体に対して、現代批評理論との関係において、とりわけポスト構造主義の批評に基づいて読み直しを行なった功績は注目されねばならないだろう。

もちろん残された課題もある。世紀末文学をモダニズム文学との連続性において捉える視角は理解できるが、論をより説得的にするには、その相関関係についての一層広範な検討が必要であろう。また、ラスキンの芸術論とペイターやワイルドの詩学との関わりについてもより詳細な考察の余地が残されていよう。いずれも今後の課題である。また、本文中の引用に、日本語と英文の二様があり、統一性を欠いた印象を与えるのが惜まれる。

しかし、これは望蜀のごときもので、本論文の価値を損なうものではない。本論文は日本における世紀末文学研究の到達点を画するものであり、本格的な論考として英文学界に大きな影響を与えるであろう。本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。